
私の騎士（かれ）は女の子！？

猿道 忠之進

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の騎士は女の子！？

【Nコード】

N8573Z

【作者名】

猿道 忠之進

【あらすじ】

戦乱の大陸ハームレイ、その中で最も大きく安定しているのが、騎士の国ベルムンティア王国である。

そのベルムンティア王国の近衛騎士、エステイオ・アストールは若手ナンバーワンと呼ばれる実力者だ。

そんな彼が元宮廷魔術師で、指名手配犯の黒魔術師ゴルバルナを追い詰めるのだが……。あと一步のところまで逆に振り返り討ちにあう。

意識の途切れた彼が目覚めると、彼は絶世の美少女になっていた。彼女の体を取り戻す旅が今、始まるうとしていた。

コメディ女体化ファンタジーです。読んでいただけると、とても光栄です。評価や批評を頂けると、なおのこと光栄です。

プロローグ（前書き）

序盤はタグにある男の子、オネシヨタ要素は一切ありません。

プロローグ

町に一步出れば、路地には露店が並んで、活気があふれている。

商店の前で値段交渉をする主婦や、その周囲を駆け回る子ども、老若男女すべてがこの客層である。そんな人ごみの中を、一際体格の大きな青年が歩いていった。

背丈は人より頭が一分抜きん出て、体格は一言で表せば筋肉質だ。均整のとれた体つきから、その青年が何かしら武道をしているのはすぐわかる。

その彼の顔はとても不機嫌そうなものだった。

「何が、褒美の休暇だ。ただの厄介払いじゃねえか」

などと毒づく青年は、プラチナブロンドの短髪の頭をかきながら毒づいていた。

「アストール。気分転換は必要だよ。最近は何暇もろくになかったし、いいんじゃないの？」

そうやって彼の横を歩く女性が、話しかけていた。別段女性として背が低いわけでもないが、その青年、エステイオ・アストールの横に並ぶとまるで大人と子どものように見える。

「気分転換か……。こんなにスッキリしないのに、気分転換も何もあるかよ」

アストールはそう言うと、王城で起きた事件の事を思い出していた。

「ああ！ ちきしょう！ 思い出しただけで、ゴルバの野郎を逃がしたのが腹が立ってくるぜ！」

アストールはそう言うと、むっとした顔で叫んでいた。

だからと言って、彼を見る人はいないに等しい。叫び声も周囲の活気の中に、飲み込まれていた。

「仕方なからう。アストールよ。奴は宮廷魔術師でありながら、黒魔術にまで手を出していた。そして、何より、奴はこの国で一番の魔術師だ。あんな悪魔どもを召喚されては、我々とどうしようもない」

そう言ってアストールを諭すのは、ジュナル・レストニアという魔術師である。彼の従者であり、教育係も務めている。

33歳と歳の割には落ち着き払っていて、どことなく爺くさいおやじである。

「ジュナルの言うとおり。王城が損壊するくらいに暴れられたら、どうしようもないって」

「メアリー。あいつは今でも黒魔術の生贄を探してるんだぞ？ しかも、生きた人間をだ！ そんな奴を放って、こっやって遊んでられるかよ」

そう言って先ほどの女性、ことメアリーに対して言う。だが、彼女の答えは至って冷静なものだった。

「見つけようにも、見つけられない。ましてや、相手は鼻のいい犬と一緒に。こっちが近づけば、臭いに気付いて逃げちゃうよ？ だったら、尻尾だすの待つのが、狩りのセオリーでしょ？」

メアリーはそう言って如何にも、元獵師らしいことを言う。

「だがよお。ん？」

反論しようとしたアストールは、そこで言葉を止めていた。

何かを見つけ、目を細めて一点を見つめる。

すぐに異変に気付いた二人は、アストールの顔を見ながら問いかける。

「どうしたエステイオよ？」

「いや、さっきゴルバを見たような気がして、あの外套を被った野郎」

そう言ってアストールは、人ごみの中を指さしていた。その先には確かに外套を頭からかぶった怪しい人物が、歩いている。

「まさか。こんな近くにいるわけないじゃん」

メアリーはそう言うなり、アストールの背中に抱きつくように飛び乗っていた。目を細めて彼の言う外套男を見ると、男は一瞬だけちらりと顔をこちらに向ける。

そこで二人は言葉を合わせていた。

「本当にゴルバルナだ」

「ジュナル！　すぐに駐屯騎士隊を呼んで来い！　メアリー！　お前は早馬に乗って王城に知らせるんだ！」

アストールの的確な指示に、二人は顔を合わせていた。

「何やってる！？　奴が逃げるぞ！」

「だが、エステイオよ。一人で行っては危険すぎるのではないか？」

ジュナルの問いに、彼は不敵な笑みを浮かべて答えていた。

「借りはきっちり返す。俺はあいつを追う！」

そういふなり、彼は腰に下げていた剣をぽんぽんと叩いていた。

「やはり、一人で行くのはよさぬか。ここはやはり三人で行った方が」

「近衛騎士のご主人様からの命令だぞ？」

そう言われると、さすがのジュナルも引き下がるしかない。

因縁のある相手ゆえに、アストールが一人で行きたがるのはよくわかる。だが、相手は元宮廷魔術師であり、現在は大魔術師と言っても過言ではない相手だ。

一人で行くには危険が過ぎる。

「なぐに、心配すんな。無理はするが、無茶はしない」

アストールのその言葉に、二人は不安を隠せなかった。だが、呼び止めるよりも先に、彼は走り出していた。

大きな背中を見送った二人は、主人の身を按じながら言われたことを実行するのだった。

「この野郎！ 待ちやがれ！ 腐れど変態魔術師がああ！」

アストールが駆けているのは、町からほどなくしてある森の中だ。

外套男は彼を見るなり、即座に逃げだしていた。それがアストールの足を、余計に速めていた。

けして若くはないゴルバルナが、18の体躯のいい青年に追いつかれるのは時間の問題だった。暫くして、外套の男、ゴルバルナは走るのをやめて、彼の方へと向き直る。

「く、この筋肉馬鹿のオーガめ！」

ハアハアと息を切らせた初老のゴルバルナは、アストールを前に毒づく。

「へへ！ 体力だけは自信があるんでね！ さあ、変態爺！ 覚悟しやがれ」

アストールは鼻をすすると、腰の帯剣を抜いて構える。

例え相手が丸腰であっても、容赦をしない覚悟の表れとも取れる。

「く、こんな男に、私の夢が、計画が邪魔されるとは！」

ゴルバルナはそう言うと、殺気を込めてアストールを睨み付ける。そして、腰から杖を取り出して構えていた。

「観念しろ！ どうせすぐに騎士隊が来る。てめえは終わりだ」

「それはどうかのお？ さあ、行くぞ。炎の聖霊よ。我が言葉にしたが」

詠唱を始めたゴルバルナに、アストールは一気に間合いを詰めていく。

ゆづに大きな家一つ分くらいの距離を、あっという間に詰めていた。

「な、なんと!?!」

詠唱が終わるよりも先に、アストールの鋭い太刀筋がゴルバルナを襲う。

ゴルバルナはとっさに杖を横に構えて、彼の太刀筋を防ごうとした。だが……。

剣が杖を真っ二つに斬り、ゴルバルナはおじけずいてその場に尻もちをつく。

「へ、魔術師つてのは、杖がねえと何も出来ねえ人間なんだろ？」

杖を折られたゴルバルナは、不敵に笑みを浮かべるアストールを見上げ、悔しそうに睨み付けていた。

「貴様、それを知っていて、わざとあの距離を」

「ああ。あえて、てめえの杖を切らせてもらったんだ。さあ、次はてめえの番だ」

アストールはそう言うと、剣の切っ先をゴルバの首に突きつける。

形勢は完全にアストールのものとなり、ゴルバは一瞬で表情を変えていた。

「ひいい。ま、待ってくれ。助けてくれ」

おびえた表情を見せて、右手をアストールに向けるゴルバルナ。それを見て、アストールは表情をゆがませる。

「ああん？ てめえはそうやって助けを求める人を、黒魔術の実験で殺していったんだろ？ 助けてやるぎりなんてな、ねえんだよ！」

アストールはそう言うと、剣をゴルバルナの喉元に突き立てようとす。その時だった。

突然アストールの胸の前で爆発が起こり、焼けつくような炎が彼を襲っていた。

爆風で吹き飛ばされたアストールは、剣を抜いた位置まで吹き飛ばされる。

「ぐああー！」

地面に叩き付けられたアストールは、薄目を開けてゴルバルナを見る。ゴルバルナは右手をそのままにして、立ち上がり愉悦に浸った笑みを浮かべていた。

「どうじゃ？ 儂の一世一代の大演技は？ 見事じゃったろう？」

ゴルバルナは煙の上がる右腕を上げたまま、ゆっくりと歩み寄る。アストールが持っていた帯剣はどこかに吹き飛び、魔法をもろに受けた彼は胸を押さえて動けないでいた。

「な、なぜ。杖は破壊したはずだ……」

その言葉を聞いた瞬間に、ゴルバルナはどっと笑いだしていた。

「ははは。忘れたか、儂は黒魔術師よ。禁断魔法でこのくらいのことなど、容易いことよー！」

一気に形成の逆転した立場に、ゴルバルナはどっと笑い出す。

「ああ、愉快愉快。儂の計画を邪魔し、頓挫させてくれた貴様には最高のプレゼントじゃ」

魔法をもろに食らったアストールは意識を失いかけ、朦朧とする意識の中眩いていた。

「ああ、ちきしょう。最後に最高の女が抱きたかったぜ……」

そういふなり、彼の意識はぶつとりと途切れていた。

本当ならば、ここで彼の命などなくなっていたに等しい。だが、ゴルバルナは右手を下げ、気を失っている彼の前まで歩み寄る。

「ふむ。ただ、殺すだけではつまらん。どうせなら、もっと精神的に苦痛を与えてやってもいいだろう。わしが味わった以上の苦しみを味わうがいい」

ゴルバルナはそう言うと、またしても歪にゆがんだ笑みを浮かべていた。

ハームレイ大陸、かつては魔法を主流とした大帝国が栄えていた。だが、そんな帝国も皇帝の家柄の断絶によって、バラバラとなってしまう。

今やそのハームレイ大陸はいくつもの国々が乱立する戦乱の世を迎えていた。

そんな中、一際大きく安定した国がある。それがベルムンティア王国。

かの国ではかつて帝国が行っていた非人道的な魔術を禁止し、その魔術を研究する者に罰則を与えていた。

そして、その非人道的な魔術を研究する者を黒魔術師と呼んで、

蔑視することに成功する。世界においてもこの流れが確立し、早、700年。ベルムンティア王国は領土が最大となり、最盛期を迎えていた、

俺が女の子!? 1

「こつちにはいたか!？」

「いや、いない!」

耳に入ってくる男たちの声を聴き、アストールは目を覚ます。いまだに魔法を受けた胸が痛み、体も自由に動かない。

「どうするんだ?」

「どうもどうもあるか! あの黒魔術師を追い詰めたというのに」

男たちの会話を聞く限り、ゴルバルナはそう遠くには逃げていない。い。

何より、自分はなぜか助かっている。

そのことに安堵しながら、アストールは目を開けていた。

「大丈夫?」

目を開けるとそこにはメアリーがいる。心なしか彼女がいつもより大きく見える。

「気が付いたわ!」

ぼやける視界にアストールは、周囲を見回していた。

森の道を巡回する銀色の甲冑に身を包んだ騎士とその従者たち。

騎士は馬に跨って指示をだし、従者は森の中を搜索する。

メアリーの声に即座に現れたのは、ジュナルだった。彼もまた心配そうに、アストールを見ていた。

「大丈夫かね？」

ジュナルがそう他人行儀に聞いてくる。

心なしか、ジュナルも自分よりも背丈が大きく感じられた。

(これが敗北するってことか……)

アストールはそう思うと、なぜか涙が零れ落ちてくる。

あそこまで追い詰めておきながら、自分の油断でまたしてもゴルバルナを逃がしてしまった。そう思うと、情けなくて仕方がなく、また、胸の奥に詰まっていた思いが吹き上がってきたのだ。

「だ、大丈夫？」

慌てたようにメアリーがアストールの目頭からこぼれた涙をふき取る。

「何か怖いことでもあったのであろう。もしかするとゴルバに乱暴されているのかもしれない」

(そう、乱暴されていた。ん？ 待て、確かに乱暴されたが、なんか言い方が違うよな)

「ジュナル！ そう言うことを本人の前で言わないの！」

メアリーがそう言うと、ジュナルは目を背けていた。

「お、おう。すまん。拙僧としたことが、気も使えずにすまぬ」

「でも、もしそうだったら、私、絶対許せない！」

メアリーが珍しく自分のために怒っていることに気付いて、アストールは妙にうれしくなる。ここはもう少し、彼女の膝の上で頭を寝かしておこう。

「にしても、あの筋肉馬鹿。どこ行ったのかしら？」

(ん？ 筋肉馬鹿？)

寝つこうとしたアストールは、すぐに目を覚ます。

「全くもって。あのお調子者が。いくら、綺麗な裸の女性を助けたからとて、自分の着ていたすべての衣類までも被せることもなかるうに」

ジュナルの言葉を聞いて、アストールは完全に目を覚ましていた。

(お、おれが裸？ ん？ 女性が裸？ じゃなくて、なんだ？ 何を言ってるんだ？)

「でも、裸でゴルバを追い回してるとなると、ちょっと笑えるかも」

メアリーがそう言うと、ぷつと吹き出す。

「全くもってその通りだ。まあ、それだけ余裕があるとみていい。安心してあのバカを待とうではないか」

ジュナルも自然と笑みを浮かべて、森の方へと顔を向ける。
明らかに二人は勘違いしていた。なんせ、メアリーとジュナルの目の前に横たわっているのは……。

「な、何言ってるんだ？俺はちゃんとここにいるじゃねえか？」

瞬時にしてアストールは絶句する。そして、その言葉を聞いたメアリーとジュナルが、怪訝な表情を浮かべていた。

自分の出した声は明らかに女性の声、それもかなりの美声だ。

数瞬動きを止めたアストールは、その場で立ち上がっていた。
立ち上がった瞬間に全ての服が、スルリと抜けおちる。自分の体を見た瞬間に、アストールは言葉を失っていた。アストールだけではない。

周囲の者が一斉に動きを止め、アストールを凝視する。
もちろん、ジュナルもメアリーもである。

手を見れば細く、明らかに女性の綺麗な指が並び、その手を痛む胸に持っていくと、豊満な乳房がついている。

「あ。ある」

そして、そのままぎこちない手つきで、股間まで手を回してがっくしと肩を落としていた。

「な、ない……！」

その奇行に暫し全員が動きを止めていたが、メアリーが慌てて下

に落ちていた服を拾ってアストールの体にかけていた。

「ちよ、ちよっと。み、みないの！ 殿方は全員作業に戻りなさい！ さっさと戻れ！」

メアリーの怒るように言うと、全員がすぐに作業に戻っていた。立ち上がったメアリーと一緒に視点に、アストールは再び絶句する。

「ちよ、ちよっと、これはどういうことだ！？ なんで俺は女に！？」

「なに言ってるの！？ そんなことより、アストールはどこなの？」

奇行に気分を害したらしく、メアリーの口調はきつい。

「え？ 目の前にいるじゃねえか」

「はあ？ なになめたこと言ってるの？ あんたがアストールなわけないでしょ！」

混乱するアストールにメアリーが怒声を浴びせた。奇行に加えて見ず知らずの裸の女性がアストールと言い張るのだ。メアリーも気分が悪くなるのも無理はない。

「いやいや、メアリー聞いてくれ。俺はアストールだ。本当に俺なんだ」

「んなわけないでしょ！ あんたみたいな美女が、アストールなわけない！ 第一にあいつは男よ！」

「落ち着いて聞いてくれ。メアリー！ 何がなんだか俺にもわからないんだ。どうして自分が女になってるかなんて、俺が知りたいくらいなんだ！」

メアリーに対してアストールは至って真剣に話す。

最初は悪ふざけをしていると思ったのだが、とても彼女が嘘アストールを言っているとは思えなかった。

メアリーはそれに気付いて、怪訝な表情を見せながらも聞いていた。

「じゃあ、あんたがアストールだって言うなら、証拠をだしなさいよ」

そういわれて、アストールはしばし考えた後彼女に言っていた。

「エステイオ・アストール。王族付近衛騎士隊。第一軍団の軍団員。好んで使用する武器は大剣だ。レマニアル領の領主で、大抵、領内の奉公は爺さんにまかせきりだな。それによく口を酸っぱくして、将来のレマニアルの未来はどうなるうか心配だって言われてるぜ」

自信ありげにアストールは腰に手をやっていう。けして威張れるようなことでもないのだが、なぜか彼は自慢げにしていた。

どれもこれも知らうと思えば、知れる範囲の答えである。それに対して、メアリーは訝しげに目を向けていた。

「信じられないわ。第一に男が女になれるわけないもの」

「じゃあ、あれはどうだ？　俺がゴルバの秘密研究所を王城地下室で見つけたこと」

アストールの口から出た言葉に、メアリーは押し黙る。

王城の地下にゴルバの研究所があったことは、一部の関係者以外には口外されていない。ましてや、誰かが喋っていれば、それこそ処刑に値する。

だが、それでもメアリーは納得しかねていた。

目の前にいる金髪美女が、アストールの名を語ること自体怪しい出来事だ。もしかすると、魔術にかけられたゴルバの手先ではないかという懸念さえある。

「それに男が女になれるわけない！」

「……じゃあ、どうすれば信じてくれる？」

アストールがそう言うと、メアリーは暫し考え込む。そして、時間をあけて答えていた。

「私との出会いを話して」

それを聞いたアストールは、すぐにしゃべりだす。

「日が昇りきらない朝だったか。お前が狩りをして、妖魔8体に襲われてる所を、俺が助けた。確かその時、お前は弓の矢が切れていて、無謀にも素手で戦かおうとしてたな」

そう言われた時、メアリーはにわか信じがたいが、彼女がアストールであることを確信した。

なぜならば、その運命的な出会いは、誰にも口外していない。また、アストールにもこのことは言わないように口止めしていたのだ。

なおかつ、初めて会ったのは森の中で、けして街中で見られるようなことはない。

要は二人だけしか知りえない情報である。

「う、うそよ。うそ」

メアリーは半分確信していただけに、余計に目の前の現実を否定したくなる。

「こんなこと、こんなことあり得るわけじゃない！ 絶対にあいつがほかの女に喋ったんだ！ 女癖悪いしさ！」

「その言いようはヒドイな！ 確かに女癖悪いのは認めるが、俺は秘密を守る男だ。お前との秘密は何一つ他の奴にしゃべってねえ！」

女性の声だが、いつも聞いている口調で言われて、余計にメアリーは胸が張り裂けそうになる。

「う、うそよ。こんな、こんなの」

完全に否定しようがない事実には、メアリーは涙を流していた。

「ちょっと、待てよ。泣きたいのは俺の方なんだぜ？ なんで、お

前が泣くんだよ！」

「だ、だって、だって」

すぐにでも抱きしめてやりたい所だが、生憎、ほぼ全裸の状態だ。幸いメアリーが差し出した服で、体は隠れているが、禁欲主義の宗教騎士隊には生足に生腕はいささか攻撃的すぎる。ジュナルも目のやり場に困っている様子で、泣き出したメアリーに声をかけることができないでいる。

「だあ。もう！ くそお！ あのゴルバめ！ とりあえずあいつのせいだ！」

そうやけくそ気味に言うアストールは、泣き出したメアリーを宥めつつジュナルに目を向ける。

「ジュナル！ すぐに俺の着替えと馬を用意してくれ」

一連のやり取りを見ていたジュナルは、彼女がアストールであることに気付いていた。

「はは。とはいえ、まさかアストール殿が女になるとは……」

そう言ってジュナルはその場を立ち去っていた。

アストールの身がようやく落ち着いたのは、その日の夜の事だった。

俺が女の子!? 2

宿の一室には灯りがともり、温かい光を放っている。だが、その火を囲む三人の表情は暗い。

丸テーブルを囲む三人は、茶色い髪の毛に白髪交じりのジュナルに、茶髪のショートヘアのメアリー、そして、背中まで伸びた美しい金髪の“女性”アストールの三人である。

酒はなく、あるのは質素なコップに入った水だけだ。

「にわかには信じがたいが、これまでの話を聞く限り、この方がアストール殿であるのは間違いない」

ジュナルは渋い顔をして、アストールを見つめていた。

この宿に戻ってから、メアリーとジュナルは女体化したアストールを、改めて尋問していた。

事細かに最近あったことから、本人しか知りえないことを次々質問する。

当然、アストールは全て答えていた。

「……やっぱりあなたは本当にアストールなのね」

メアリーはとても残念そうにうつむく。

「ああ。そつだ」

アストールは少し服がきついのか、胸元ばかりを気にかける。

「にしても、少し胸のあたりがきついな」

その空気の読まない発言に、メアリーはぎつとりとした視線でアストールを見る。

「なによ。それは私の胸が小さいって、遠まわしに言いたいのか？」

「い、いや、そうじゃなくて、純粹にきついんだってば」

そう言ってアストールは、自分のはち切れそうな服の胸元を指さしていた。

女性ものの服がなく、急遽メアリーの服の着替えをきているのだ。もちろん、アストール本人の服など、とてもではないがぶかぶかで着れたものではない。

「なによ！ やっぱり、冷やかしじゃない！」

「う、うるせえな！ 俺だって望んでこんな体になったんじゃないよ！」

「その言葉、余計に腹立つわ！」

メアリーがそう怒声を浴びせるが、ジュナルはため息をついてなにもしない。というよりは、アストールの胸元が気になっているせいか、どうにも目のやり場に困っていた。

「二人とも喧嘩はよせ。それよりもこの状況をどうカルマン殿に説明すればいいのか。それを考えようではないか」

休暇で訪れたこの町は、レマニアル領に帰郷する途中で寄った町だ。

まさかこの様な事になるなど、誰が想像していようか。

「……爺さんには本当のことを話すしかないだろう。それよりも俺が気になってるのは、騎士としての仕事の方だ」

アストールはそういうと、窮屈そうに胸の前で腕を組む。

ジュナルもメアリーも名案が思い浮かばないのか。全く言葉がでてこない。

「この状況だもの。急にいろいろ考えろっていわれても無茶よ」

メアリーはそう言うとき大きく溜息を吐いていた。

「ふむ。まあ、そうであろうが、一応の指針はあったほうがよかる」

ジュナルはそういうと腕を組んで考え込む。

「とりあえず、王族付近衛騎士団の騎士に女は禁制。というか、騎士そのものが女性は禁制だったわよねー」

メアリーはそういうと、アストールを見つめた。

騎士団の従者くらいならば、女性がいてもおかしくはない。だが、当の騎士の身分となると、話は違ってくる。

基本的に騎士の位に付けるのは男のみであり、女性が爵位を貰うことはない。

もしも、女性であることを公表して、形式的に騎士として居続けたりとしても、いずれは爵位剥奪と言う危険さえある。

「何かいい方法はないかな……」

メアリーはそう言うと、考え込んでいた。

「いっそのこと、自分を偽ってみてはどうか？」

ジュナルがそう提言すると、アストールは苦い顔をする。どうせろくでもない提案であることに違いない事を確信しつつ、アストールは聞いていた。

「どづいうことだ？」

「そうだな……。お前は実は生き別れた実の妹であり、自分の体を取り戻すまでは、兄、すなわちお前自身の騎士代行を務めるということにしておけばいいのではないか」

ジュナルの提案はある程度、説得力のあるものだった。

彼ら騎士の世界において、主人が行方不明になったり、長期で国外に出張した際は、誰かしら従者が騎士代行を務めて業務を行うことがある。

その任命権はもちろん、その主人たる騎士にある。

これは別段珍しいことではなく、従者に女性がいれば、代行を女性に頼むことさえあった。とはいえ、それでも女性の騎士代行は、異例には違いなかった。

「かなり目立つんじゃない？ それ」

メアリーはそう言ってジュナルに疑問を問いかける。

「確かに目立つであろうな。しかし、拙僧やそなたが騎士代行になつて、アストール殿に指図することなど、できようかな？」

ジュナルは腕を組んで細目で、メアリーを見ていた。

「うう。確かにちよつと抵抗がある」

「ちよつとつてなんだよ。主人だぞ？」

「なによ。別に全く忠誠心がないわけじゃないもん！」

メアリーが子どもっぽく言い返すと、ジュナルは苦笑していた、

「二人とも落ちつきなさい。エスティオよ。今日から女を演じるのも、悪くない提案であると思うが、どうであるうか？」

ジュナルが微笑を浮かべて、アストールを見つめる。

アストールは頬をピクつかせ引きつった笑みで、ジュナルと目を合わせていた。

「じよ、冗談じゃねえええ！ 俺は男だぞ！？ 急に女になれなんて、無茶があるだろうが！」

そう言つてアストールは椅子から立ち上がり、自分の胸を押さえていた。

彼の手に伝わる柔らかな乳房の感触、それが自分が女であるという現実を突きつける。

アストールは勢いよく叫んだことを後悔していた。表情は暗いものとなり、ゆっくりと椅子に座る。

「す、すまねえ。確かに今は女だ……」

アストールは心底落ち込み、ため息をついていた。

「わかればよい。とはいえ、いきなり女を演じよと言っても無理である。」

ジュナルは自分で提案したことを、いきなり否定しだした。

「というわけで、一か月ほど修道会に行ってきたはどうか？」

アストールは再び顔色を変えて、ジュナルに叫んでいた。

「ば、馬鹿言え！　なんでそんなところに行かなくちゃなんねえんだ！　女しかいない上に陰湿だし、飯はまずいし、生活は真面目くさって規制されまくってるような場所、絶対に行かねえぞ！」

貴族の女性はある一定の年齢になると、貴族専用の修道会に入れられて、改めて貴族の嗜みというのを再教育される。

一夜を共にした女性から話を聞いていたアストールは、その厳しさと女の世界の怖さというのをある程度は知っていた。

「なんで、あんたがそんなこと知ってるの？」

メアリーが鋭い突っ込みを入れて、アストールは言葉を詰まらせる。

「あ、そ、それはだな。えーとだな。まあ、みんな知ってることじゃないか？」

「そうかな？　普通の殿方は修道会ってきいても、そこまで知らないんじゃない？」

「……ど、どうだっていいだろうが！ そんなことより、俺は絶対に行かないからな！」

焦って話をはぐらかすアストールは、ジュナルを睨み付けていた。このような提案をされるとは、思っても見なかったのだ。

「では、どうするか？ エステイオ。お前はいきなり女を演じることができるのか？」

アストールはそう言われて、言葉を詰まらせていた。だが、すぐに言い返していた。

「お、女とたくさん寝てきたし、他の騎士と違って、普段から女と付き合いがあるんだ！ そのくらい楽勝に決まってるんだろ！」

彼の発言を聞いたジュナルは苦笑して、彼に言っていた。

「では、まずその喋り方から変えねばなるまい」

「うう。こ、これはどうにもなんねえよ」

「それに歩き方だ。傍から見ても男と分かってしまうような歩き方」

そう指摘されたアストールは押し黙るしかなかった。

いきなり女性を演じると言われても、そうそうできるものではない。それは彼自身がよくわかっていた。

「……。だからって、そんなとこに俺を入れて、しかも、女そのものになれってのは、酷すぎるぜ」

今にも泣きだしそうな顔で、アストールはうつむいていた。

「じゃあ、女になりきれんっていうの？」

メアリーの言葉に対して、アストールは暫し黙っていた。だが、すぐに顔を上げて、答えていた。

「やるしか、ねえだろ。一か月も修道会で遊んでたんじゃ、ゴルバルナの野郎に逃げられちまう。それにあいつにこんな体にされたんだ！ 戻るためにも早急に奴を見つける方が先だ！」

最もらしいこと、否、最もな意見を盾に、アストールは修道会入りを拒否する。

ジュナルもそれには納得したらしく、大きく頷いて見せていた。

「そうであつたな。確かに優先すべき事を間違つておつた」

「そうよね。こんな女のアストールなんて、何か馴染めないしね」

「だったら、決まりだろ！ 俺も努力して極力女を演じる。だから、協力してくれ！」

アストールの真剣な表情に、メアリーは優しい笑みを浮かべる。

「当たり前でしょ！ あんたにはさっさと男に戻って、じゃんじゃん騎士として仕事してもらわないといけないし！」

ジュナルは腕を組んだまま、アストールを見つめている。

「レマニアル領をいずれは治める身、それが女性であつては他の諸侯にも示しがつきませぬからな」

そう言われてアストールは苦笑していた。いずれは自分も祖父、父と代々アストール家で守っていた領地を引き継ぐのだ。

そうなれば、今の体のままではどうすることもできない。

結婚して養子婿をとるといふ選択肢もあるが、生憎、アストールは女として生きていくつもりはない。

「よし、じゃあ、さつさと爺さんに話を付けに行こう！」

「そうであるな。さて、その前にエステイオ。そなたの名前も女として改名しておかなければなるまい」

ジュナルはそう言って腕を組んだまま、アストールを見つめる。どうしても自分を女に仕立て上げたいらしく、アストールは心底機嫌を損ねていた。

「おいおい。勘弁してくれ」

「仕方あるまい。まあ、容姿からして17くらいで通じる。一つ下の妹ということで、そうであるな……。エステイオ、エステイオ……。ああ。エステイナはどうか？」

一人で勝手に話を進めていくジュナルに、アストールは諦めていた。

この後、ジュナルとメアリーによって、アストールの妹設定は次々と決められていくのであった。

苦痛の真剣試合 1

レマニアル領についたアストールたちは、早速事情を祖父のカルマン・アストールに話していた。

領内の中心にあるアストール家の館。その一室でアストールの姿を見たカルマンは、その場で泣き崩れて嘆いていた。だが、暫くしてから、アストールら三人の提案を受け入れていた。と言うよりは、受け入れざるをえなかった。

「俺が俺の妹を演じるから、爺さん。手続きとか色々頼む。この通りだ」

変わり果てた自分の孫の姿とはいえ、その動作からは確かに元の孫の面影が見える。白髪の祖父カルマンは、大きいため息について答えていた。

「仕方なかるうに。そのかわり誓え。絶対にゴルバルナを捕まえ、元の体に戻ると」

「神に懸けて誓う。爺さんにまた、元の元気な俺を見せてやる」

「うむ。それでは、書面の作成をしる。王族付騎士団には私から話を付けておく」

カルマンはそういうなり、部屋から出て行こうとする。だが、入り口の前で立ち止まり、アストールの方へと振り向く。

「お前は元の体に戻るまで、今日よりエステイオの妹、エステイナだ。それは肝に銘じておくのだ。わかったな」

「わかってるって、爺さん」

その軽い口調に、カルマンはアストールを睨み付ける。

「わかっておらぬ。それではまるで男ではないか！」

そう言われて、アストールは渋々口調を改めていた。

「わかりました。おじい様。これでいいか？」

何かを言おうとしたがカルマンは、喉まで出かかっていた言葉を飲み込んで、溜息をついて答えていた。

「まあ、いいでしょう」

そう言ってアストールの祖父、カルマンは足取り確かに部屋から出ていくのであった。

それと入れ替わるように、ジュナルとメアリーが部屋に入ってくる。

「どうであつたか？」

ジュナルが心配そうに聞くと、アストールは得意げに胸を張って答える。

「ああ。爺様は俺が騎士代行を務めることを、騎士団に話しつけてくれるとね」

「そうであつたか。それはよかった」

ジュナルは胸をなでおろして、一時的に状況が安定したことに安堵していた。

「まさか、アストールが女だなんて、誰も思いもしないだろうし、騎士団に行っても大丈夫かもね」

メアリーはからかうようにアストールに言う。

「まあ、美貌を持った女であるし、強さも変わってないはずだ。そこは心配ないだろう」

アストールはそう言うが、ジュナルは何か不安そうな表情をしていた。

「その事で話がある」

深刻そうな表情を浮かべたジュナルに、アストールは怪訝な顔をして彼を見る。

「何だ？ 話つてのは？」

「それなのだがな。ここに来てから書斎で黒魔術関係の書物を調べていたのだが、ある程度のこと分った」

相も変わらず深刻そうな表情のまま、ジュナルはアストールに続ける。

「なんだ？」

「力は男のときより大分落ちている。その体はあくまで女なのだ」

「え？」

シヨツキングな事実にも、アストールは言葉を失う。

「うそだろ？」

「本当だ。その証拠にそなたの部屋にある大剣を持ってきてやった」
ジュナルはそう言って肉厚な両手剣を、アストールの前に差し出していた。

「いやいや。冗談はよしてくれよ。これで毎日練習してきたのによ」
そう言いながらアストールは、大剣を受け取る。
いつもよりもずっしりとした感覚が手に伝わり、アストールは心の中で焦燥していた。

明らかに手に持った感覚だと、いつもの数倍は重く感じられる。
いつもならば軽々と持ち上げて、この剣を両手で構えて甲冑ごと相手を叩き割れるのだが……。

今はどうだろつか。
柄を持って構えようとしても、まず持ち上げるのがやっとの状態だ。

「う、うそだろ……」

どうにか剣を両手に構えるが、今のアストールにはそれが限界だった。

大きな床を割るような音と共に、アストールは大剣を落としてい

た。

それと同時に床に腕と膝を着いて、じっとして動かなくなる。

「む、無理だ。こんなに力が落ちてるなんて、想像もしてなかった」

絶望するアストールに、ジュナルは困ったように彼女を見る。

「当然の結果と言うことか……」

「クソ……。これじゃあ、どうやって戦うって言うんだ」

アストールはそう言うと、拳を握り締めていた。今の今まで騎士になるよりずっと以前から、大剣を扱うために並大抵以上の努力をしてきた。

毎朝、貴族としての勉強の合間には筋肉を付けるために日々トレーニングし、常に自分より大きな真剣で素振りをしてきた。

体が大きくなれば、自分よりも一回り大きな剣を用意し、毎日それで素振りをする。

そうして幼い時から剣を変えては、自分で訓練していた。それから、騎士の従者となってから、最高の訓練を受けて、今の太剣を使えるようになったのが丁度二年前だ。

物心ついた時から怠ったことのなかった努力が、今、水泡と化していた。

自分の力のなさに、アストールは絶望し、努力の儚さを憂い悲しむ。

その落ち込みようを見たメアリーは声をかけ様がなく、ただ、目をそむけるだけだった。

「だが、その剣術が全く使えなくなったと言うわけではあるまい」

そう言ってジュナルが、剣を差し出してくる。

剣の柄には蔓と柏の装飾が施され、どことなく高貴さを感じさせる。刃そのものも細身であり、男であったところに持てば、棒の枝切れと同じ感覚で振ることもできただろう。

「俺の趣味じゃあねえな……」

「文句を言うでない」

アストールはそう言いつつも、ジュナルから細剣を受け取っていた。予想外に手にしっくり来る上に、重さも軽すぎず、だからといって重過ぎない。

今の体には最もフィットする剣であることは間違いなかった。

「悔しいけど、この剣が一番いいかもしれねえ」

細剣を鞘から抜くと、銀色の刀身を見る。そして、構えてから二、三度素振りすると、そのまま鞘に閉まっていた。

「扱いやすい……。くそ……。こんな細身の剣なのに」

今の動作を見れば、剣舞を舞っているかのごとく鮮やかであった。本人がそれを一番分っている分、余計に悔しさがにじみ出る。

「つまあ、そういうわけだ。これからはその細剣に暫く厄介になるだろう」

何も言い返せずに、アストールはその場で肩を落とすのだった。

アストール達は領内で数日間の休暇を取ったあと、すぐに王都ヴ
アイレルに戻っていた。

休暇の間も書類の用意に加え、女性モノのレギンスにブーツを購
入し、オーダーメイドのプレートアーマーにヘルメットを用意せね
ばならず、ろくに休めもしなかった。

とりあえずは領内一の鍛冶屋にプレートアーマーなどの甲冑類防
具一式の製作を依頼し、そのまま王都に向かっていた。

出来上がればすぐにでも王都に届ける手はずは整えている。

そして、王都についたアストール達は、早速第一近衛騎士軍団の
軍団長、エストル・キャビオーネの元へと向かっていた。

アストールはブロンドの髪の毛であるが、アストールとは対照的に
長く髪の毛を伸ばし、その美形の顔は美青年と呼ぶに相応しい。典
型的な騎士像というに足りる外見である。

だが、内面はアストールと同等か、それ以上の遊び人である。
体の線が細いエストルは、騎士団長の席に座ったままアストール
を見つめる。

「で、君があのエステイオの妹君の」

「エステイナ・アストールです」

アストールはそう言って、以前から知っている知人に自己紹介し
ていた。

先輩であり、上司であり、そして、何より、女遊びでアストール
に新たな境地を与えたのが他ならぬエストルだ。それだけに、アス
トールは警戒しなければならなかった。

「それにしても、美しい……」

早速のお世辞攻撃に、アストールは内心気分を害していた。

顔はかなりの美形、そして、何より脱げば引き締まったスタイルのいい適度な体、そのラインを強調するかのような服の着こなしは、普段から女性を意識しているからだろう。

「お褒めにつかって、感謝します。それよりも、私の騎士代行の件につきまして、お話が」

軽く流してエステルに言うと、彼は少しだけ表情を歪めて答えていた。

「ああ、その件であったな。貴公も生き別れて生活していたとはいえ、貴族の血を引くもの。その資格は十分にある」

アストールはエステルを見据えて、少しだけ表情を柔らかくして言う。

「ありがとうございます。では、今日からでも騎士代行の務めを」

「ならんな。まだ話は途中だ」

エステルは椅子に肘をついて、足を組んでみせる。その大きな態度に、アストールは内心憤慨していた。

「せっかちなところは兄上によく似ている。貴公に騎士になる資格はある。だが、例え騎士となっても、頭だけではなく武術に關しても、確かなものがなければならぬ」

女性であるがゆえに、余計にその辺りを気にするのだろう。

エステルは真顔のままアストールに言っていた。

「貴公は確かに貴族の人間。しかし、女性である上に、今の今までは街で暮らしていたと聞く。そんな貴公に武術ができるのか？」

疑わしい視線を向けられ、アストールは思わずムツとなる。

いつもの口調で叫びそうになるのを我慢しつつ、アストールは言い返していた。

「もちろん、できますとも。こう見えて、兄上とあつた時は稽古を付けてもらってましたから。少なくとも、そこらの男よりは強いはずです」

アストールはそう言うのと腰の細剣に手を置いていた。エステルはそれを聞いて、しかりと笑顔を浮かべていた。

「ほほう。そうか。だが、その実力は未知数だ。どうだ？ 私と勝負して勝てば、騎士代行を務めさせるのは？」

「え？」

そう言われて、思わずアストールはその甘い言葉に乗りそうになる。

今の今まで、一対一の戦いでは、どの騎士にも負けた事はない。

それゆえにその言葉はとても甘い蜜のように感じられた。

だが、アストールは自分が女の体である事を思い出し、すぐにその提案にのるのをやめるか迷いだす。

「そ、その、それは少し、酷なものがあるんではありませんか？」

そう言って助け舟を出したのは、メアリーだった。彼女の言葉に

エストルはムツと眉を吊り上げて、メアリーを見つめる。

「酷なことなどあるものか。どのような敵に対しても、対応せねばならない。それが騎士の務めであるう。ましてや、この騎士に勝てないようでは、騎士代行など務まるものか」

などともっともらしい事を言うエストルだが、本当のところは得体の知れない女に騎士代行を務めさせたくないのが本音だ。

無理難題をふっかけて、早々に退場してもらいたいと言うのだから。だが、ここでアストールも引き下がるわけにも行かない。

自分の体を取り戻すために、絶対に騎士代行となり、ゴルバの行方を追わなければならないのだ。

「確かに、エストル卿の言う通りでございます」

そう言ったのは意外にも、アストールの信頼する従者、ジュナルだった。

「流石は聡明な魔術師殿、分っております」

エストルは笑みを浮かべて、ジュナルを見つめる。それにジュナルも柔和な笑みで返していた。

「とはいえ、軍団長自らがお相手することもないと思つのですがな
「何？」

瞬時にしてエストルの表情が険しいものとなり、周囲に険悪な空気が流れる。

「この様な小娘相手に、態々軍団長が手を煩わすこともありませんまい。それにいくら本場の騎士に稽古を付けてもらっていたとはいえ、女性であります。ここは騎士見習いか、新人騎士程度に勝てるほどの実力があれば、十分に武の才能があると証明もできると拙僧は考えます。どうでしょうか？」

ジュナルの提案は話のはぐらかし様がないほどに、的を射ていた。騎士代行の実力を推し量るだけに、軍団長自らがでしゃばるのは、いささか大げさが過ぎるのだ。もし、出たとしても、それこそ軍団長として恥というものである。

それが分らないエステルではない。
ジュナルの言葉を聞いたエステルは、渋々にこういつていた。

「それもそうであるな。ジュナル殿の言うとおり、私が行くのもでしゃばり過ぎというものだ」

アストールはエステルが自分の相手をしない事を、心から安堵していた。

武術に自信があるとはいえ、それは男の体であった時の話だ。今はまだ自分の実力さえわからないのである。

「では、その方向でよろしいですか？」

ジュナルの問いかけに対して、エステルは大きく頷いて見せていた。

「そうだな。こちらで相手は手配しておく。準備ができ次第、また追って連絡しよう」

アストールの納得いかない表情を見て、アストールは内心思う。

（ざまあ、見やがれ、優男め！）

この後待ち受ける試練のことなど、今のアストールには知るよしもなかった。

苦痛の真剣試合 2

エストールとの面会から数日が経った。そんなある日、エストールの元に騎士団の使いがやってきていた。

王城の一室をあてがわれていたエストールに、敬意を払いつつエストールの従者は慇懃に礼をして見せていた。

「それで、いつ私を試す試合をする？」

エストールは慣れない口調で、従者に聞いていた。

「はは、三日後に新人騎士のウェイン・ハミルトンと真剣試合をしてみせます」

その言葉を聞いたエストールは、しばし言葉に詰まっていた。

ウェイン・ハミルトン。エストールと同じ年の騎士で、質実剛健という言葉がぴったりの騎士である。体格はがっしりとしているが、適度な筋肉量でエストールほどの筋肉はない。それゆえに素早く動き、なおかつ力技の使える手ごわい相手である。

エストールは何度か稽古で手を合わせたが、ちょこまかと動き回られ、苦戦したのを覚えていた。それでも隙が全くないわけではなく、一瞬の隙をついてウェインを打ち負かした。

今のところは負けることはないが、こちらが努力を怠れば、すぐにも追い越される相手であることに間違いはなかった。

それはあくまで男であった時の話であるため、エストールからすれば勝機のある相手とは思えない。

「ウェインをあてつけるか……。エストールめ」

そう呟いたアストールに、従者は怪訝な表情を浮かべていた。

「ウェイン殿をお知りで？」

問い詰められたアストールは、すぐに笑ってごまかしていた。

「ああ、いや、兄上から聞いたことのある名前です。話には聞いていないのです」

自分の言葉使いを気持ち悪いと思いつつ、アストールはすらすらと答えていた。

「そうですか。それでは油断なきよう心して挑んで下さい」

そう言うなり従者は部屋から出ていく。

後ろにいたジュナルは、アストールを見てから苦笑していた。

「どうやら、私の提案は逆にそなたの首を絞めてしまったようだな」

「え？ いや、何にしろ一緒だ。どうせ相手は男、今の俺では結局不利なことに変わりねえ」

アストールはそう言って立ち上がり、部屋にかけてある鏡の前まで行く。

女性物のレギンスにブーツが、その綺麗なヒップラインを強調している。それに加えて上半身の豊満な胸と腰の括れが、憎らしいほどのエロチズムを感じさせる。

それだけではなく、凛々しい目つきにほっそりとした顎のライン、透き通るように綺麗なプラチナブロンドのロングヘアの美女が、

鏡越しに立っている。

「だあああ！ 畜生！ 見れば見るほどにいい女じゃねえか！ くそおお！ なんで俺はこんないい女になっちまってるんだあああ！ できるなら、今すぐこの女を抱きたいぜ！」

半分やけくその本音をこぼしながら、アストールは自分の頭を掻き毟る。

メアリーは呆れながら、首を左右に振っていた。

「女遊びを自重しろという神のお告げかもしれぬな」

ジュナルがその様子を苦笑してみると、アストールは表情を歪める。

「そんなお告げなんてクソくらえだ！ 畜生、この世で一番いい女と思ったのが、なんで自分なんだよ！」

けしてナルシストな発言ではない。アストール自身が男であれば、こんな女性を目の前に通り過ぎたりはしないだろう。

だからこそ、この発言なのである。

「まったくいい薬よ。せつかくのいい女なんだし、いつそのこと喜んでら？」

皮肉以外の何物でもないメアリーの発言に、アストールは大きくため息をついていた。

「そうかもな。いや、そうじゃない！ 全部ゴルバが悪い！」

アストールは一人納得してから、自分の腰にある細剣に手をかけていた。

「絶対にあいつを捕まえて、元の体に戻ってやる！ その後で酒池肉林の宴だ！」

などと不純なことを口に呟く始末、メアリーとジュナルは顔を見合わせて首を振って呆れるしかなかった。

「うーイライラする。なんでこんなにイライラすんだ」

その日のアストールは妙に落ち着きがなく、机の上に肘をついて指をトントンと叩いていた。メアリーは何気なしに、彼に言う。

「やっぱり、急に体変わったからじゃない？」

「そうか？ まあ、それならいいんだが、なんとなく腹が立つというか」

戦いの日が前日にせまっていたその日、アストールは妙に落ち着きをなくしていた。

女性である体に慣れないと、そう言われるとアストールも納得がいく。だが、それでもこのイライラは何かが違う気がするのだ。

アストールは居ても立ってもおられず、椅子から立ち上がった。た、

「あー畜生！ 気が晴れねえ！ 明日が試合だつてのに！ なんてこんなにイライラすんだ！ ちくしょおお！ メアリーちよつと、肩慣らしでもしてくるわ！」

「なら、私もついていく」

気軽にそう言うメアリーは、アストールと共に王城の武術場へと向かっていた。

王城にある武術場は、文字通り武術を練習する場所である。近衛騎士以外にも、その従者や貴族といった武人が多く集まる場所である。

武術場につくと、騎士や貴族、そしてその従者と多くの男性が稽古をしていた。

騒がしさこそないものの、その真剣な雰囲気はメアリーは気圧されそうになる。

「さて、やるとするか！」

アストールは細剣を腰から抜く。そして、すぐに素振りをはじめた。

武術場に女性が居るだけでも異質であるのに、それが美人であるとなると目を惹かないわけがない。

素振りをするたびに、揺れるアストールの胸に周囲の男性たちは様々な表情を見せる。

アストールを注視するものや、厭らしい目をする者、また、目のやり場に困るものなど、人それぞれ、個人の性格が如実に表れる。

とはいえ、男ゆえに胸に目が行くのはしかたがない。

それでもアストールは周囲の視線を気にする素振りを見せない。いくら素振りをするが、アストールは首をかしげる。

「どうにも型が定まらないな……」

そう言ったアストールは細剣を上段から振るうと、振り下ろした細剣を下ろしきった位置から再び振り上げた。かと思えば、今度は柄を両手に持ち、横に薙いでいた。そして、すぐに反対方向に細剣を薙ぐ。

それはあくまでも、両手剣を扱う時の型が混じった異様な型とも言うものだろう。

細剣であるならば、片手で剣の切っ先を前に構えて、突くことが基本となるからだ。

周囲の騎士達からすれば、女如きが武術の基礎を知らずに剣を振っている、噴飯ものであったりするのだが……。

アストールのその動きのキレの良さには目を見張るものがあった。それが余計にアストールに注目を集める。

「う、美しいな」

「ああ、全くもって。剣術こそ半端だが、動きはなぜか素人を感じさせんな」

そう呟いた騎士二人が、アストールの近くで腕を組んで彼女の剣術を見ていた。

アストールは当初、それほど気にはせず練習に集中する。右に左にと剣を振り、そして、相手がいるかのごとく身を動かしていく。長く伸びた髪が靡き、美しい体と相まって、それはさながら音楽に合わせて綺麗に踊っているようにさえ見える。

周囲の目が集まるのも、時間の問題だった。

気が付けば、周囲には人垣ができていて、アストールはそれに気付けて剣を腰の鞘にしまっていた。

「ちょ、ちょっと、何なんだよ！ あんたたちは？」

気分が乗ってきたところで、急に集まりだした人々。

今までこの武術場で何度となく練習をしてきたが、こんなに人だかりができたのは初めての経験だった。

いつもならば、憎たらしい言わんばかりに年上の騎士が睨み付けてきたり、新人からは嫉みの視線を浴びてと、敵だらけだった。

それがどうだろう。美少女の体になった途端、周囲は騎士やその従者、貴族に取り囲まれていた。

今まで経験したことのない異様な雰囲気と男の猛る性を前に、アストールは後ろに一步下がる。

そんなアストールにお構いなしに、一人の貴族が彼女かれの前に歩み出ていた。

「私の名前はマルクス・ゲオル公爵。あなたはお美しいうえに、剣術まで心得ている。よければ、私にあなたのお名前をお教えください」

「あ、この野郎！ 抜け駆けさせるか！」

ゲオルと名乗った貴族の前に、また違う男がアストールの前に現れる。

だが、彼は名乗ることなく、次の男に殴られて床に突っ伏す。

「脅えてるだろうが！ さあ、お嬢さん。こんな所は危ないですから、私と共にでましょ」

男の言葉は最後まで続かず、また、別の男が殴り倒していた、

「おい！ お前という方が危ないだろ！」

「どつちが危ないことか！」

「なんだと！」

男たちは勝手に争いごとを始め、武術場は乱闘の場となっていた。呆れかえるアストールに、メアリーは何故か不服そうな表情を浮かべる。

本来男であったアストールが、女である自分よりも男を引き付けていることに、多少納得がいかないのだ。

アストールは大きく息を吐いた後、メアリーに言う。

「面倒なことになったな……。場所を移そう」

乱闘に加わりたい衝動を抑えたアストールは、メアリーを連れて王城の中庭へと向かっていた。

二人の背中では尚も、乱闘騒ぎが続いていた。

「だあ、ちつくしょう！ 全く、男にもてたつてうれしくないんだよ！ くそ」

二人して王城の中庭に出て、アストールは細剣を抜いて素振り始める。いつもよりも荒々しく剣をふるう姿は、正に何かに憑りつかれた様な我武者羅さ。

少し上手くないだけで、叫び声を上げる。尋常ではない苛立ちようだ。

先ほど武術場で見せた華麗な剣術も、今は見る影もない。

「だあ！ もう！ ちっとも型が定まらねえ！ やめたやめた！」

そう言うなり細剣を鞘にしまう。

まだ、素振りを初めて数分も経っていないにも関わらず、すぐに剣舞をやめていた。

「このクソ虫！ 鬱陶しい！」

アストールは近くを飛ぶ綺麗な蝶を見て、更に苛立っていた。

この異様な苛立ちは、先ほどの剣舞の邪魔から来るものではない。尋常ではない苛立ち、メアリーはその苛立ちが何から来るのか、心当たりがあった。

「まさか、まさかね……」

そう言いつつも、メアリーは半分確信していた。この苛立ちの原因が、“あの日”の前兆であることを……。

苦痛の真剣試合 3

「それではこれより、騎士代行の試験試合を開始したいと思います。使用する武器は自由、また真剣を使うため、お互いに命を落としても恨みはなし」

立会人が王城の中央中庭で、叫ぶように言っていた。大勢のギャラリーが集まり、周囲には人垣ができています。

王妃やその娘の王族に加え、彼らを取り巻いている有力貴族の娘たち、それ以外にも暇を持て余した騎士達に、王城の近衛歩兵に給仕、侍女など、上げればきりがありません。

それもこれも、今日、異例の女性騎士代行が誕生するかもしれないという、王国始まって以来の一大イベントが開催されているからである。

その人垣の輪の両端に、それぞれの陣営が居座っていた。一つは第一近衛騎士軍団の軍団員たち。そして、もう一方がアストールとジュナル、メアリーの三人である。

「ふむ。相手側は王族も来ているというからに、かなり緊張している。これは十分に勝機があるな」

腕を組んだままジュナルが、冷静に相手陣営を注視する。

アストールの相手であるウェインが、いくら実力者とはいえ、実戦の経験もなければ、王族の前で剣の腕前を披露した経験などあるわけがない。

そのせいかウェインの表情は固いを通り過ぎて、青ざめているように見えた。

「でもさ、こっちもこっちで大問題なんだけど……」

メアリーがそう言うって顔色の優れないアストールを見つめる。その顔は苦痛にゆがみ、額には脂汗をかいていた。

「うっ、いてえ。なんだ……この金的受けたような腹痛の持続は……」

腹を押さえて動けないでいるアストールは、息を荒げていた。

「そうよね……。昨日あれだけ苛立ってたし、そうだとは思ってたけど……」

メアリーは半ば諦めた様に、首を左右に振っていた。

「も、もしかして、アストールよ。生理痛か？」

ジュナルのデリカシーのない質問に、アストールは痛みに耐えながら答えていた。

「ああ、そうだよ！ 畜生！ やっぱり女なんていやだ……」

小声でそう弱音を吐くアストールは、それでもどうにか痛みをこらえて立ち上がる。

「アストール！ 大丈夫なの？」

メアリーの心配をよそに、アストールは苦笑しながら答えていた。

「だ、大丈夫だ。あんな、新人野郎、ちょちよいとやつつけてくる……」

アストールは場馴れしている上に、何度も王族とは顔を合わせている。この状況程度で上がるようなことはない。

とはいえ、初めて味わう女性の苦痛に、アストールが圧倒的に不利なことは間違いなかった。

「これでは、互角か、それ以下の戦いになりかねないな……」

ジュナルは心配そうに言うが、始まってしまったものは仕方がない。

彼が勝つことを祈るしかない。

「それでは両者、前へ！ 定位置へつけ！」

立会人を務める男の声で、アストールとウェインは対面した。

皮の胸当てをしたウェインは、アストールを見て少しだけ表情を固める。

同じようにアストールも、皮の胸当てをしているが、動きやすい服装のためか、自然と女性らしい体型を前面に押し出していた。

「ルールは先ほど説明したとおり、どちらかが降参するか、武器を落とすかである」

審判員は最後の確認をするように、両者を見た。そして、二人が剣を抜き、お互いに構えたのを見て叫んでいた。

「始め！」

それと同時に、ウェインは騎士の試合に乗った形で、剣を胸の前に持っていき自己紹介を始めていた。

「我が名はウェイン・ハミルトン！ベルムンティア王国の由緒ある騎士である！お手合わせねが……」

両手でも片手でも使える長めの剣を、ウェインは胸の前に構えたまま言葉を続けようとする。だが、アストールは名乗ることなく、彼に一気に詰め寄っていた。

「問答無用！」

その一声を上げ、アストールはウェインに正面から細剣を振り下ろす。

思わずウェインは後ろに下がって、即座に剣を構えなおしていた。繰り返される次の一撃を、ウェインは長剣で受け流す。

大きな金属音が中庭に響き渡る。

「な、名を名乗らないのか！？」

「そんなの実戦じゃ、通用しねええ！！」

機敏に動くアストールは次にまた、即座に細剣を振り下ろす。

その動きは傍から見れば、まるで踊り子が華麗に舞っているように見える。

「こ、これは試合だ！形式上名を名乗るのは普通だろお！」

そう言って一瞬の隙をついて、ウェインは剣を振り下ろしてくる。彼の一撃を受けきれないと判断したアストールは、即座にステップ

で後退していた。

空を振るウェインの剣が、周囲の観客をどつとにぎわせる。

「ちょこまかと！」

ウェインは睨み付けるように、アストールを見つめる。だが、すぐに彼女の異変に気付いた。それほど動いていないにも関わらず、額には汗をかいている。

それ以外にも腰を少しだけ引き、剣を持たない手で腹を押さえようとして、すぐにやめる。そのしぐさを見て、ウェインは彼女の体調が悪いことに気づいた、

「動かないなら、こっちから行くぞ！」

アストールはとにかく短期決戦ですませるつもりで、再びウェインに距離を詰めていた。

「あ、おい！」

何かを言おうとしたウェインは、繰り出される右に左にという大ぶりでも、隙のない細剣の振るいに防戦を強いられる。

アストールは生理痛と戦いながら、ウェインを確実に追い詰めていく。

ウェインは防戦を余儀なくされ、徐々に後ずさっていく。

その戦いぶりに周囲は歓声を上げて、双方を応援していた。

だが、それも一時のものだった。ウェインがアストールの振りを受け流すように見せつつ、大きく細剣を弾いていた。

アストールは予想しない動きに、姿勢を崩していた。

一瞬できた隙に、ウェインは剣を振り下ろす。

アストールはとつさにその場で態勢を立て直して、細剣で受けようとする。だが、とても真正面から受けきれるような一撃ではない。体を思い切りひねり、どうにかウェインの一撃を避ける。

だが、そこで体中に激痛が走っていた。

腹部からくる激痛が、へビがのた打ち回るように全身を襲う。

痛みで声もせず、アストールはその場に膝をついていた。持っていた細剣を地面に突き立て、体を支える。だが、それがやっとの状態だ。

「アストール。相当やばそう」

メアリーは心配でたまらなくなるが、どうする事も出来ずに彼女を見守る。

「ふむ。これまでもしれん」

ジュナルは残念そうに首を左右に振って見せる。

ウェインは苦痛に耐えるアストールを見て、思わず彼女に駆け寄ろうとする。

だが、一瞬動きを止めて、彼は葛藤した。

今剣を向ければ、彼女に勝つことができる。だが、このような状態の、しかも女性に剣を突きつけるなど、騎士道精神に反するものだ。腹部を押さえたまま、立ち上がれないアストールを前に、ウェインは剣を構えたまま動かない。この奇妙な状況に、周囲は一気に興奮ざめしていた。

「おい！ 何やってる！ ウェイン！ さっさと剣を突きつけろ！
それで終わりだぞ！」

ウェイン陣営からは野次が飛ばされ始めるが、彼自身なかなか決

心がつかなかった。

「おい！ 何やってるんだ！？」

「あの新人騎士は馬鹿なのか？」

「ああ、勝てるのに……」

などと周囲からも罵声や野次などが聞こえてくる。
それにウエインはムツとして、その場で剣を放り捨てていた。

「この勝負！ 最初から私の負けだ！」

ガラーン！という石畳に転がる剣の音が、むなしく響き渡る。

「このエステイナ殿は、並半端な覚悟でこの勝負に挑んでいない！
その証拠に、彼女は体調不良であるにも関わらず、私との試合に
挑んだ！」

ウエインはそう言うと、周囲に向かって叫んでいた。

「私は男である前に騎士である！ 無抵抗な者に剣を向け、勝者を
気取ることなどできない！ それに決意の固さでも、私は負けてい
る……。これで剣を向けて、私が勝ったとしても、その勝ちはけし
て誇れる勝利ではない！」

ウエインはそう言うなり、アストールに近寄っていた。

「大丈夫か？」

ウェインはアストールの背中に手を回し、屈んで優しく話しかける。

だが、アストールは暫く何も喋らない。

口はプルプルと震え、痛みからか唇をかみしめていた。

「き、気安く触るんじゃないねえ！」

ウェインの手を荒々しくのけると、アストールはそのまま細剣を支えに立ち上がる。

普通ならば喜んでほしいはずの勝利。だが、アストール個人としては、とても喜べるものではなかった。

女の体になったとはいえ、一度は王族に勲章を手渡されたほどの実力者だ。

ましてや、情けをかけられての勝ちなど、彼女自身望んでいたことではない。

新人に情けをかけられ、逆にアストールの尊厳と誇りを傷つけていたのだ。

とても乙女の使う言葉と態度でないことに驚きつつ、ウェインはそれでもアストールの傍に居続けた。

「し、しかし、あなたは体の調子が悪いのでは？」

「気を遣いやがって！ 何が騎士道だ！ 負けは負けなんだから、俺にさっさと止めを刺せばよかったんだ！」

自分が女であることも忘れ、アストールはウェインに言っていた。これほど屈辱的な勝利など、アストールは望んでいなかった。こんな勝ち方をするくらいなら、いっそのこと負けてしまっていた方がどんなに良かったらうか。

アストールの元に駆け寄ってくるメアリーが、彼女の肩を担いでいた。

「もう、馬鹿ね。だから、やめておきなさいって言ったのに！」

「う、うるさい！ 棄権したら、どっちにしる負けじゃないか！」

などというやり取りをしながら、二人は場外へと歩みだす。

二人の後姿を見たウェインは、その場で呆然と立ち尽くしていた。

「見事な騎士道精神だ。見ていてこれほど気持ちの良いものはない」

そう言ったのは現王の妃、ウェインの自分から選んだ敗北を称えていた。

元々騎士の国として栄えてきたベルムンティアで、これほど栄誉なことはない。ウェインは緊張の面持ちで、王妃の言葉を聞くのだった。

それとは相反して、アストールはその釈然としない勝利に、不満を持つのだった。

「何！？ ウェインが自ら敗北したと!？」

エステルは従者から報告を聞いて、驚きの表情を浮かべていた。

「は、エステイナ様が体調のすぐれない状態で出場し、膝を突いた時、ウェイン自らが敗者と名乗ったと」

エストルはその言葉を聞いて、拳を握り締めて怒りを露にする。

「まさか、あの馬鹿は！ その様なことにならぬために、あ奴を選んだのに！ 本当に大ばか者だ！」

「しかし、王妃が荣誉ある敗北とウエインを称えております」

話の一部始終を聞く限りでは、負ける要素などなかった。だが、ウエインは自らを敗者と名乗ったという。

無抵抗な者に剣を向けることは、確かに騎士道精神にはそむくかもしれない。

だが、女の騎士代行など第一軍団では前代未聞で、仕来りを破るようなことは許されない。否、エストルは許したくない。

他の軍団なら早々に許したかもしれないが、代々すべて男手で軍団を運用してきた第一軍団をエストルは誇っていた。それが今、破られるのだから、怒り心頭なものも無理はない。

アストールがメアリーを従者として受け入れることさえも、反対していたのだ。

しかし、軍団長にはそこまでの権限はなく、渋々、メアリーが従者になることを認めざるを得なかった。

それが今度は騎士代行に女性がなるといふのだ。

エストルはエステイオ・アストールに対する憎悪を募らせる。

以前は仲がよかったが、ある出来事をきっかけに二人の仲は犬猿の仲となっていた。今でも合えば、最低限の事務的会話以外はしないだろう。

「エステイオの疫病神め！ 絶対に後悔させてやるからな」

そう呟いていたエストルの元に、なに者かが部屋をノックする。

「なんだ？ 今は取り込み中だぞ！」

エストルはそう言うが扉の外の人物は、一向に立ち去る気配はない。

「エストル様、エステイナです」

美声が扉越しに聞こえ、エストルは余計に腹立てる。今の苛立ちの原因が、自分の元に来たのだ。不機嫌そうにエストルは、叫んでいた。

「今は貴様の顔など見たくもない！」

「試合の件で話をしにきました！」

アストールの声にエストルは、何かに感づく。これは何か言い知らせがあるのではないかと。鼻のきくエストルは、すぐに態度を変えていた。

「なに？ ならば入るがいい」

扉を開けてアストールが部屋に入ってくる。

綺麗なうなじに、そこからは女性らしい流線を描く胸、またそこから腰までの括れはとても魅力的だ。つくづく見ていて美人な妹であると、エストルは内心思いつつ聞いていた。

「して、話とは何か？」

「はい。先日の試合、私は納得していません。率直に言います。再戦をさせて下さい」

アストールの言葉にエステルは、内心ほくそえんでいた。まさかこんなにすぐに、この女を追い出す機会が来るとは思っていなかったのだ。

エステルは部屋にいた従者に目配せする。すると、従者はそこから出て行き、部屋にはアストールとエステルの二人きりとなっていた。

「ふむ。確かに私も納得しておらん」

その言葉を聞いたアストールは、表情を明るくする。

「だが、王妃様がウエインを称えた以上、再戦をするなど、王族の顔に泥を塗るも同義だ」

その言葉をきいたアストールは、途端に表情を暗くする。それを見たエステルは、ニヤついていた。

「だが、先ほどもいったが、私も納得していないのだ」

エステルは企みを含んだ笑みを浮かべると、アストールを見つめる。

「どうだ？ 非公式にもう一度再戦し、勝てば騎士代行を認めるといふのは？」

どことなく怪しい提案に、アストールは怪訝な表情を浮かべてい

た。

「しかし、それでは。私が負けた場合の処置が、決まらないのでは
ありませんか？」

エステルは口元をつり上げると、アストールに答えていた。

「どちらにしる非公式であるから、気にする事はない。勝てばその
まま騎士代行につけばいいし、当然、負ければ、君から騎士代
行を辞退する形にしよう。あの勝ち方で納得できないと言えば、
自然な成り行きでもあろう？」

エステルのこと何ら不思議な事はない。だが、どこか怪
しく感じていた。

しかし、あの試合では納得できなかったのは事実だ。その再戦が
できるのなら、アストールはその話に乗ろうと思ひ、口を開けて
いた。

「では、その条件で行きましょう」

アストールは自分の戦う相手の事を聞こうと、続けて口を開く。
その前にエステルは、彼女の言葉をさえぎるようにして言っていた。

「おっと、まだ、話は終わっていない」

エステルの笑みを見たアストールは、即座に何かあると悟る。怪
訝な表情を浮かべたアストールに、エステルは得意げに言う。

「もう一つ提案がある」

「提案？」

眉根をひそめるアストールに、エステルはさも当然という風に言っていた。

「もしも、お前が負けても、この提案さえ飲めば、騎士代行を認めてやろう」

怪しげな雰囲気を出すエステルに、提案の見当を付けつつアストールは聞き返す。

「その提案というのは？」

「ああ、俺と一晩共にしろ」

あまりにも予想通り過ぎる答えに、アストールはため息をついていた。

「ああ。そんなことだと思った……。失礼ですけど、あなたと寝るくらいなら、騎士代行になりません。それに、私は負けない！」

必死で男口調になるのを抑えつつ、アストールはそう言っていた。

「ずいぶんと威勢がいい。しかし、私が直接相手をするとなれば、そうもいくまい」

アストールはそのいい口に、腹を立てて言い返す。

「だれであろうと、ぶったおすまで！ あんたであろうと関係あるもんか！」

「ほほう。ではいいのですね？」

「なんでもきやがれ！」

いつの間にか男口調に戻っていたことに気付いて、アストールは内心焦っていた。

もしも、自分の正体がばれれば、それこそ、一生の恥というものだ。

「いいでしょう。試合はあなたが正式に騎士代行に任命される前日です。その日まで精々腕を磨いておくといい」

笑みを浮かべたエストールを前に、アストールは彼を睨みつけて部屋を出ていく。

そこでアストールは、ふと気づく。

エストールが自ら相手をするということに。

「ああ！ やば！ 乗せられた！」

気づいた時には後の祭り、ウエインとの再戦も叶わない。

何より乗せられたことに、アストールは自分の不甲斐なさを感じざるをえなかった。

「あゝ、もお！ こうなったら、何でもやってやる！」

半分やけくそに決意を固めたアストールは、自分の部屋へと戻るのだった。

傭兵と騎士代行

「で。その提案も前提に非公式試合を受け入れたってわけ？」

メアリーが腕を組んで呆れながらいうと、何も悪びれた風もなくアストールは答えていた。

「そういうわけだ。仕方ないだろうが！」

一度言ったことを覆すことを、アストールはよしとしない。

「どんな野郎が来ようと、今度こそぶっ倒す」

拳を手の平にぶつけて、自信にありふれた表情をするアストール。いつものアストールならば、とても頼もしく見えるのだろうが、生憎、今の外見は細身の美女である。どんなに強く見せようとしても、それが逆にか弱さを強調してしまう。

「で、負けた時はどうすんの？」

「だから、負けなければいい。それだけだ」

自分を追い込み、奮い立たせるやり方が、相も変わらず健在なことに、メアリーは溜息を吐くしかなかった。その姿がメアリーの目には儚く、そして、不安を感じさせるように映るのだ。

「ちょっと、勘違いしてない？」

「なにが？」

メアリーは眉根をひそめて、アストールに向き直っていた。そして、叫ぶようにアストールに言っていた。

「今のアストールは女なのよ？　なのに、勝てる勝てるって、前みたいに力のごり押しなんて、通用しないんだよ？」

メアリーの鋭い指摘に、アストールは黙り込む。そんなことは、当の本人が一番分かっている。だが、彼はそれを認めようとはしない。いや、認めたくなかった。

「アストールの身に何かあったらって思うと、心配でならないんだから！」

そうきつくいうメアリーに、アストールは思わず立ち上がって言い返していた。

「お前に俺の何がわかるってんだ！　俺は急に女に変えられて、わけ分らない中こうやって努力して！　俺のつらさがお前にわかるのかよ！」

きつくあたるアストールの顔は険しく、メアリーはその場で俯いてしまう。

「……じゃない」

「ああ？」

メアリーに対して聞き返したアストール。彼女はすぐに顔をあげ、大きな声で彼に言っていた。

「分かるわけないじゃない！ でも、私は、あなたが心配だから、
こうやって……」

語尾の方が弱々しくなり、最後には彼女は目に涙を浮かべていた。

「私が、私が心配たしら、迷惑なの？」

一時の感情に身を任せて怒鳴りつけた事を、アストールは後悔した。メアリーがまさかここまで心配していたなどと、思いもしなかったのだ。

その場でぼろぼろと涙を零しだすメアリーに、ばつが悪そうにアストールは顔を背ける。

だが、今更ここで引こうにも、彼は引けなかった。

彼女は自分が悪いと分かりつつも、変な意地かれが謝るのを邪魔する。そして、逆にアストールはメアリーに対して、逆なでする発言をしていた。

「ああ、迷惑だ！ そのせいで試合に負けたら、どうしてくれる？」
思ってもいないことが、口から飛び出してくる。

その一言を聞いた瞬間に、メアリーはぐっと悔しさをかみ締めて、アストールから顔を背けていた。そして、涙を流しながら、その場を駆け出す。

「馬鹿！ わからずや！ そのまま、女で居ればいいのよ！」

そう叫んだあと、彼女は部屋から駆けて出て行っていた。

それと入れ替わるようにして、ジュナルが部屋に入ってくる。

「アストール。メアリーが泣いて出て行ったぞ？」

ジュナルが心配そうにアストールに聞くと、彼女かれは腕を組んでジュナルからも顔を背けていた。

「知るか、放っておけばいい」

何かしら喧嘩したのだろうということを察し、ジュナルは溜息を吐いていた。

「早めに謝りに行った方がいいぞ？」

ジュナルにそういわれ、アストールは子どもの様に背を向けて答える。

「俺は、悪くない……」

その言葉を聞いてジュナルは再び溜息を吐いていた。

自分に後ろめたい事があるから、そうやって顔を背けているのだろう。そう言ってやりたくなくなるが、ジュナルは今ここでそう言うのは、逆効果であるのがわかっていた。

それが分っているからこそ、ジュナルはここでその話題を終わらせていた。

「そうか。それよりも、裏試合まで時間がない。最後の調整のために、もう一度アレクサンド卿の元に行き、細剣の扱いを教わってはどうか？」

ジュナルがそう言うと、アストールは表情を和らげていた。

「それも、そうだな。いいかもしれない。今の俺の構えは細剣を扱う構えじゃないしな」

アストールはジュナルの提案を、快く受けていた。

アレクサンド卿とは、アストールが騎士見習いの時に預かってもらっていた騎士である。彼に騎士道を教え、剣術を叩き込んだ師匠である。

今は一線を退き、山にこもって一人ひっそりと暮らしているという。

「もう二年も経つし、たまには顔を出さないと怒りそうだしな」

近衛騎士に任命されてから、この方仕事が忙しく、顔を合わせる暇もなかった。

だが、この機会にたまには顔を合わせるのもいいかと、アストールは考える。

「おぬし、もう自分の性別さえも忘れたのか？」

ジュナルはそう言って呆れながら、アストールに問い詰めていた。

「あ、そうか。俺は今、俺の妹ってことになってんだっただな」

今更になってアストールは、自分が女であった事を再度認識する。それと同時にメアリーが言ったことが、頭の中で思い出された。

『今のアストールは女なのよ？　なのに、勝てる勝てるって、前みたいに力のこり押しなんて、通用しないんだよ？』

その言葉はアストール自身、最も自覚していることである。

ジュナルに手渡された大剣は、あり得ないほど重く感じられた。あの太剣を扱うのに、手の豆を何度もつぶし、手には剣ダコが多くなってきた。

そこまでしてようやく自由自在に扱っていた大剣が、全く扱えなくなっている。

その力の退化のしように、アストールは絶望感さえ覚えていた。

だからこそ、早く男に戻らなければならない。けして、そのことを忘れていたわけではない。だが、男に戻らなければならないという焦燥感と苛立ちが、彼女を余計に意固地かれにしていた。

だが、アストールは冷静になって考える。メアリーがどれだけ心配し、そう言ったのかを思うと、いても立っても居られなくなる。

「そんなこと、わかってるぞ……」

アストールはそう呟くと、ジュナルに顔を向けていた。

「ジュナル、ちょっと用事を思い出した。さっきの話は後でしょう」

アストールの顔の変わりように、ジュナルは微笑を浮かべる。

彼女の心境かれの変化を機敏に感じ取って、ジュナルは微笑んでいた。

「そうですか。では、後ほど」

そんなジュナルの微笑みを背に、アストールは細剣を片手に部屋を駆け出していた。

部屋を駆け出した後、メアリーは王城から飛び出していた。

既に日は暮れ始め、街中の街灯には火が灯りだしている。そんな中、涙を浮かべてメアリーは歩いていった。

王城から真っ直ぐに続くメインストリートから、少し外れたところには歓楽街が広がっている。昼間よりも夜中の方が賑わう、淫猥な世界だ。

この時間帯になると、酒場はその猥雑な世界の中に行かないとあいていない。

メアリーはまっすぐにその歓楽街の中へと、足を踏み入れていた。彼女を見た男たちが、何やら笑みを浮かべて話しかけてくる。だが、例えどんなに容姿端麗な美男子がでてきたとしても、彼女は足を止めないだろう。喧嘩をして気分が悪いのに、男に声を掛けられると鬱陶しく、腹立たしいのだ。

メアリーは男の誘いの全てを無視して、普段王都に居る時に向かう酒場へと足を進めていた。

「何よ、アストールの馬鹿！」

酒場の席に着いたメアリーは、そう言って度数の高いコオルテというこの国独自の酒を煽っていた。

「人が折角心配してやってんのに！」

瓶からコップにコオルテを勢いよく移し、コップを煽って飲み干していく。

「おうおう、姉ちゃん自棄酒かい？」

そう言っただけで済んだのは、数名のがたいのいい男たちだった。見た目からして屈強なという表現があうだろう。だが、その男たちの表情は、下品な笑みというにふさわしい。

「何か？」

メアリーは酔うに酔えないこの状況に、男三人を睨み付ける。

「こんな所で女の子が一人でいるなんて危ないぜ？」

そう言う男は断りなしに、メアリーの丸テーブルの席についていた。

「俺たちは王城付の騎士だ。お嬢ちゃんが危ないから、俺たちが守ってやるよ」

そう言っただけで一人の男が、メアリーの正面に座っていた。

「ああ、そう。それで？」

ろくでなしの騎士に絡まれ、メアリーは心底落胆していた、本当に王城付騎士ならば、自分たちを近衛騎士と名乗るだろう。特に自分のステータスを武器に、女に迫ってくる輩はそうだ。であるのに、近衛騎士と言わないところからして、下級貴族の二男、三男坊の寄せ集め騎士部隊の騎士と言ったところだろう。

騎士と言ったものの、その言動には品がなく、格式もない。

長男が家系を継ぐため、行き場のない二男、三男坊は、大抵、親のコネで何かしらの職業に就く。その中で最も多いのが、王立騎士である。

仕事内容は近衛騎士と違わないのだが、領地を継げない貴族の次男坊、三男坊の集まりと言うこともあってか多くの騎士がやさぐれている。

「つれないお嬢さんだね。俺たちみたいな騎士を目の前に、ここまで無関心な子は初めてだよ」

男はそう言つて苦笑して、首を振って見せていた。そんな男の前でメアリーは内心毒づいていた。

(間が悪いんだよ)

人がせっかく酒を手に酔おうとしている所に、邪魔に入ってくる。それだけでも鬱陶しいのに、それが更に下級騎士のナンパときいてる。

「生憎、私は第一近衛騎士軍団の従士よ。あんたたちにかまってあげられるほど暇じゃないの」

メアリーは酒とコップを片手に席を立っていた。

挑発をしているかのような発言に、流石の騎士たちも気分を害していた。

「じゃあ、俺たちは同じ釜の飯を食ってるってことだろう?」

メアリーを追うようにして、一人の騎士が彼女の横に付いて歩い

ていた。

彼女はあくまでそれを無視し、店主のいるカウンターへと向かう。

「なあ、いいじゃないか？俺たちと一緒に飲もうぜ？」

そんな誘いなど、メアリーにとっては願い下げだ。

「何回いえば気が済むの？私はあんたらと飲むほど、暇じゃないの」

しつこく迫ってくる騎士に、いい加減飽き飽きしていたメアリーは、勘定をカウンターに置いていた。

「あ、大丈夫だって、俺が出すからさ」

そう言って男は自分の財布からお金を取り出して、店主に差し出す。どちらのお金を取ればいいのか分からず、店主は戸惑いながらメアリーを見ていた。

「あんたに奢ってもらう義理はない。マスター私のお金を受け取ればいいから」

メアリーは男を冷たくあしらうと、店を出ようと背中を向ける。そのときだった。男がメアリーの腕を掴んで引き止めていた。

「まあ、いいじゃないか。騎士の俺がおごるって言ってるんだぜ？」

笑みを浮かべた男の手を振り解こうとする。だが、騎士というだけあってか、力は強く振りほどけなかった。

「ちょっと、離してよ!」

「いいだろう。こっちに来て飲もうぜ」

男はそう言っただけで彼女を手繰り寄せると、無理やりに抱え上げていた、

「ちょ、ちょっと何するのよ! おろせ、おろせつたら!」

そう言っただけで抱えられたメアリーは抵抗する間もなく、部屋の角隅の席に連れてこられていた。その席に無理やりに座らせていた。

「さて、お嬢ちゃん。一緒に飲もうか」

満面の笑みで言う騎士たち、だが、実際のところ男たちは彼女に腹を立てていた。

あくまでも体面上は合意の上での飲酒としたいらしい。

「あんたたち、そんなだから、下級騎士とか言われるのよ!」

「な、なんだと!」

「間違ったこといった?」

メアリーは毅然とした態度で言う。もちろん、騎士達は激昂していた。

「こっちが下手に出てりゃあ、やれ、近衛騎士の従士だ。下級騎士だ。全く以って腹が立つ女だぜ! てめえがただの小娘ってこと教

えてやるうか？」

一人の男が立ち上がって、メアリーの背後に立つ。彼女はそれを警戒しつつも、前に座る二人を牽制するように言った。

「あんたたちそれでも騎士なの？ 女を相手に三人がかりで、無理やり犯そうって？」

「はん！ 関係ないな！ てめえはいっちゃんらねえこと言ったんだ。そうなたって仕方ないだろう」

前に座る男はそう言ってメアリーの背後に居る男に目配せする。背後の男が動くのと同時に、メアリーは素早く横に飛びのいていた。羽交い絞めにしようとした男は、すぐにメアリーの方へと駆け寄る。

「女だからってなめないでくれる？」

素早く立ち上がったメアリーは、素手で構える。男は馬鹿にしたように笑うと、彼女に真正面から向かっていった。背の高さの差で言うならば、頭一つ分ほど相手の方が高い。

だが、メアリーはその小ささと素早さを生かして、男の懐に入っていた。

「んな」

そういった時には、その細い腕が男の腹下に食い込み、次に膝が股間に叩きこまれる。

泡を吹き出しそうになりながら、膝をついた男の首に、メアリーは両手を組んで作った拳を叩き込む。

早速一人の男が床に這い蹲り、余裕を見せていた残りの二人も真剣な表情となる。

「こうなりたくなかったら、次は二人同時で来てもいいのよ？」

余裕を振りまくメアリーに、男は苦笑して見せる。

「ほほー。流石は近衛騎士の従士というだけある。だがな、ここがどこか分かっているのか？」

そういつた瞬間には、メアリーの後ろから一人の男が、彼女を羽交い絞めに使っていた。

「な、なんなの!？」

「馬鹿だな。お前。ここの酒場、あんたが言う下級騎士が集まるってこと、忘れてたのか？」

いつの間にか酒場内にいた男たちの殆どが、彼女の周囲に来ていた。店主はそれを見て見ぬふりをして、食器を洗い出す。

「卑怯者！ 放せ！ 私は近衛騎士エステイオ・アストールの従士よ!？」

そう言った瞬間に騎士達は動きをとめ、互いに顔を見あわせる。流石は近衛騎士でありながら、歓楽街に入り浸っているだけあって、その名前の効果は絶大と、言ったところだろうか。

メアリーは安堵しようとした。しかし、それも束の間だった。

「ああ、あの黒魔術師を追いかけて、死んだっていう間抜けか？」

「そういえば、あいつ、最近見ないと思ったら、そうだったのか。死んだんなら、何もおそれることねえや！」

「むしろ、好都合じゃねえか、積年の恨み、この女で晴らしてやるうぜー！」

状況を好転させるどころか、一変して、更に状況を悪化させていた。普段、彼の名を聞けば、ここらでは有名な「近衛騎士の喧嘩馬鹿」というあだ名で通っている。

喧嘩の強い彼を恐れて、誰も喧嘩をふっかけなくなったのが、つい最近だ。

だからこそ、使ったのだが、それも逆効果だった。ここらではアストールが行方不明になっている事が、話が回りまわって死んだことになっていた。

迂闊な発言にメアリーは嘆息ついていた。

「へへ、じゃあ、俺が一番最初だ」

メアリーは自分の置かれている状況が、最悪の事態であることに気づく。それと同時に急に彼女の胸の内から恐怖心がでてきて全身を支配する。

男たちのいやらしい視線が、メアリーに絡みつき、彼女は嫌悪感を覚えていた。だが、助けは誰も来ない。

もうここで諦めるしかない。メアリーはそう自分を押し殺そうとした。

その時だった……。

アストールは王城を出て、一直線に歓楽街に向かっていた。
メアリーとは何度となくこの王都ヴァイルの歓楽街で、杯さかすきをか
わしていた。彼女を連れて二人で酒の席を囲み、周囲からは恋人と
間違えられることもしばしばだ。

二人の行きつけの酒場は、王立騎士達が入り浸っている場所だ。

だからこそ、アストールは心配でならなかった。

騎士とはいえ、領地を継げない捻くれ者の二男、三男坊ばかりが
集まるところだ。

所詮は親の七光りで騎士になった、騎士としての心得もない者が
多い。

そして、何より、メアリーはそれなりに美人であるのだ。

そんな不逞な輩が集まる場所に、一人で行っていけば逆にアスト
ールが彼女の身を案じなければならぬ。

ましてや、もともと気の強い女性である彼女が、もめ事を起こさ
ない保証はない。

「なんで、俺があいつを守らなきゃいけない！」

などと口汚く言うが、アストールの胸の内は不安で一杯だった。

歓楽街では王立騎士相手に、よく喧嘩を吹っかけられていた。当
然、売られた喧嘩は買うのが、アストール流の流儀であり、一人で
複数の相手を返り討ちにすることもしょっちゅうだった。

もしも、メアリーが自分の従者だと公言していれば、彼女の身がどうなるかわからない。

自分の身から出た錆で、彼女が傷つくことだけはさせたくない。その思いがアストールの足を速めさせていた。そうして、ようやくいつもの酒場の前に来る。

酒場は妙な雰囲気を出していて、覗き込めば奥の一角に騎士達の集団がいる。

「遅かったか！」

アストールはそう毒づきながらも、駆けて酒場の中へと駆けこんでいた。

「おい！ これは何の騒ぎだ！？」

凜とした女性の美声が酒場内に響き、一斉に男たちは入り口に目を向ける。

そこにはメアリーの希望の光の人物が佇んでいた。

「なんだ？ 女がここに来るもんじゃねえぜ！」

長い金髪に凛々しくも優しい瞳、体の線に至っては攻撃的なグラマラスボディ。

明らかに外見は女性でも、メアリーにはアストールの男らしい佇まいがはつきりと見えていた。

「アストール！」

羽交い絞めされたメアリーは、彼女の名前を叫んでいた。

一斉に男たちは顔を見合わせる。

「アストール？」

「あの、エステイオの？」

「まさか、あいつは一人っ子だろ？」

などと声をあげる騎士達、メアリーは不敵に笑って答えていた。

「エステイオは死んでない。今はどこにいるかわからないけど、あいつの妹のエステイナが、必ずエステイオを見つけてくれる！」

そう言っつてメアリーはアストールに顔を向ける。アストールは場の動揺に便乗するかのようには、言い放っていた。

「近衛騎士代行、エステイナ・アストール。お前たちのその卑劣な行い、すぐに断罪してやる！」

腰の細剣を抜こうとしたその時だった。

彼女の手を重ねるようにして、何物かが細剣に手を添えていた。

その手を見るなり、アストールはぎょっとする。

自分の手の二倍はあろうかというごつごつとした大きな手が、自分の手に添えられていたのだ。アストールは手を添えた人物を見あげる。

髭を生やした大柄な男で、静かに一言だけアストールに告げていた。

「面白いことをやっている……」

その大男は入り口を潜るようにして入ると、酒場の全員が息を吞

んでいた。巨漢というよりは、巨人といった方が体格的にしっくり来る。

それに加え、髭の生えたむっすりとした顔付きに、鋭い目つきが周囲を圧倒していた。

「……だ、だれだよ？ あれは？」

「し、知るか……。それよりも一体なんだ？」

騎士達は恐る恐る口を動かしていた。丸太の様な大きな腕には、無数の古傷が刻み込まれ、中には服の中の方まで続く深い傷痕も見える。

「……こい」

巨体の男はそう言うなり、騎士達の前で腕を構える。

騎士達は唾を呑んでいた。

男の構えに隙がなく、無闇に踏み込むことさえできない。それに加え、相手を睨み据えるその眼は、獣が獲物を狙う殺気さえ帯びていた。

何より男のその巨体が威圧感を倍増させ、酒場そのものが息苦しくさえ感じる。

「……お、お前がいけよ」

「い、いや、お前がいけ」

「始めたのはその三人だろうが！ お前ら三人がいけ！」

威圧感だけで騎士たちは怖気づき、その場で顔を見合わせたりす

る。

そして、誰もが擦り合う様にして、男の相手を決め始めた。明らかに実力差があるのだということが、威圧されるだけでわかったのだ。

「こないなら、こちらから行くぞ……」

男はそう言って一歩踏み出す。かと思えば、次の瞬間にはその巨体からは信じられない速さで走り、一気に距離を詰めていた。

丸太ほどもあるつかという腕を横に薙ぎ払うと、次の瞬間には騎士たちが天井近くまで打ち上げられる。

そのでたらめな破壊力に、アストールは息をのんでいた。

（お、おれが元の体であったとしても、こいつと戦って、勝てる気がしないな……）

啞然として男を見ていたアストールだが、すぐにメアリーのことを思い出して駆け出していた。

メアリーを羽交い絞めにしていた男が、その場から逃げ出していたため、彼女は無事にアストールの元にかけてきていた。

「な、なんなのよ、あの男は？」

アストールの元に来るなり、メアリーは彼に聞いていた。だが、そう聞き返したいのは、アストールも同じだった。

「知るわけないだろう！ 急に出てきたんだから！」

二人が目をやるころには、十人以上いた騎士たちの全員が床に突っ伏していた。

酒場の机は壁に刺さり、踏まれたのか気の床にめり込んでいる騎士もいる。

一言で言い表すなら、大惨事が起きた後、とでもいえばいいだろう。

「他愛もない奴らだ……」

巨漢の男はそう言うなり、二人に顔をむけていた。

思わず身構えそうになるのを、二人はどうにか押さえていた。意識するよりも先に体が構えそうになっていたのだ。

男に顔を向けられるだけで、殺されるのではないかと体を勝手に反応させていた。それだけ男の威圧感は異常だった。

「ここは危ない。早めに帰れ……」

男はそう言うなり、二人の前から立ち去って行く。

残されたのはめちやくちやになった酒場の一角と、昏倒している騎士たちだけだ。

二人はどう言葉を発しているのかわからず、立ち去って行く男の背中を呆然と見つめるのだった。

「つてことが起きたんだが、ジュナル、男に心当たりはあるか？」

数日前に起きた酒場での出来事を、アストールは馬車の中で、事細かにジュナルに伝えていた。

巨人を思わせる体躯に、でたらめな腕力、そして、口数のすくなさ。それだけの特徴を言うだけで、ジュナルは大方の見当がついたらしく、馬車に揺られながら答えていた。

「その人物、私の予想ですと、コズバーン・ベルモンテという傭兵でしょう」

「コズバーン？ どこかで聞いたことある名前だな」

アストールはそう言って首をひねる。

「それはそうでしょう。この王国の西部遠征で名を馳せた有名な傭兵でありますから」

ジュナルは苦笑して見せていた。

「え？ そうなの？」

問いただしたのはメアリーで、アストールと同じくピンとこない様子だった。

「ええ。なんでも噂では、大剣を片手剣のように両手に持って自由に振り回したり、自前の大斧で一度に二十人の胴体を真つ二つにしたりと、物騒な話題にかけることのない武勇の持ち主です。あ、そういうえば、城門を体当たりで破壊したとか、そんな噂も耳にしましたな」

ジュナルは噂を信じていないのか、半ば楽しそうに言っていた。だが、そんなことを聞いても、実物を見るとあながち嘘ではないと思えてくる。

「実物を見ると、正直、噂が本当って思えてくるけどな」

アストールはそう言って苦笑する。大の男十数人を虫けら同然に吹き飛ばすコズバーンは、正に化け物というに相応しい。

「それにしても、その喋り方、どうにかならぬか？」

ジュナルは半ば呆れた表情で、アストールに目を向ける。

「どうにかならぬか？ って言われても、急に変えられるものじゃねえし、人前では女口調で居れば問題ないだろ？」

アストールの言葉を聞いたジュナルは、大きく溜息をついていた。

「普段からその口調で喋っていると、女性のかけらも感じられぬ…」。それにボロが絶対にでるであろう」

ジュナルの言葉に、アストールはしばし黙り込んでいた。

「そうよね。私が女の子らしくしてあげようか？」

メアリーが横から楽しそうに言う。

「いやー、男勝りの女にいわれてもな……」

メアリーの提案を苦笑してアストールはやんわりと断る。

「少なくとも、あんたよりは女らしいと思うけど？」

「うむ。全くもってその通り」

ジュナルもメアリーに同意して、アストールは再び黙り込むのだった。

そうして、時間は過ぎていき、日の落ちかかった頃に、三人を乗せた馬車はある山岳地帯の麓で止まっていた。

「着きましたよ」

馬車の仰者がそう言って、三人の乗っている馬車の扉を開ける。

「ようやくか……」

アストールは背を伸ばしながら、馬車から降りて行く。女物のドレスを着ずに、動きやすいレギンスやボディラインを強調する服を着ている事が幸いしてか、さほどはしたなさを感じない。

それでも仰者はいい顔をしてはいない。

メアリーとジュナルはその様子を見て、呆れながらアストールの後に続いた。

馬車を降りるとただ広い平坦な敷地が広がり、その周囲を囲う森林地帯。その奥に屋敷にある小屋のような家が二棟と小屋が一棟建っている。小屋の横には樹齢百年は優に越えるような大木もあつてか、質素な小屋にも妙な神々しさがあつた。

三人はその家に向かつて歩き出していた。

家主も馬車に気づいたらしく、家から出てきて三人の方へと向かつてくる。

家主は白髪交じりの壮年の男性で、体格のよさは男だった頃のアストールにも勝るとも劣らない。小屋のような家とは対照的な体格の壮年の男は、口の周りに髭を生やしている。

その顔で豪快に笑みを浮かべて、三人に向かつて対面していた。

「ジュナル殿、メアリー殿、久しいな。良くぞこられた。話は伺つておるぞ！」

豪快な喋りは騎士とはとても思えない。だが、それでもこの男、アストールに騎士道を叩き込んだ張本人、アレクサンド・ストーナーである。

つい数年前まで、現役の騎士であつたが、現役を退いて今ではこの辺境の山奥で静かに隠居生活を送っている。

「アレクサンド卿も変わりなくお元気そうで何より」

「はは、それで、この小娘がエステイオの妹という」

「エステイナ・アストールです。以後お見知りおきを」

左手を右肩まで上げて、膝を折って深々と頭を下げる騎士特有の挨拶を試みせる。

「ふむ。エステイオと違って流麗だな」

アストールはムツとするのを抑えて、すぐにアレクサンドに向き直る。

「話は聞いている。まさかアストール家に隠し子がいたとは、わしもしらなかつた」

アストールは師匠にまで自分を偽らなければならないことに、内心歯噛みする。

『どこから情報が漏れるか、わかりませぬからな。知っている者が少ないに越したことはありません』

とジュナルが言っていた事からも、他人と同じように師匠を欺いているのだ。

しかし、それでもアストールはどうか平静を保ち、アレクサンドを見て言う。

「はい。以前より兄上とは接しておりましたが、まさか、本当に兄弟だったことなど、つい最近まで知りませんでした。本当にどうしていいのかわかりません」

アストールの言葉は半分事実で、半分うそである。どうしていいのかわからないというのは、完全に当てはまっている。

「立ち話も難だろう。さあ、豚小屋みたいな家だが、入ってくつろぐがいい」

アレクサンドはそう言うのと三人を、自分の家へと案内していた。王都から西に一日も馬車に揺られていれば、この王都郊外につく。だが、そこから更に西に向かおうとするなら、長い距離の山道と深い森を抜けなくてはならない。

その入口がこのアレクサンドの家である。

アレクサンドが隠居生活にここを選んだのは、人があまり来ないから。ただそれだけだ。

家に入るとテーブルに案内され、三人は席に着く。

一応、元騎士らしく、客人用の椅子とテーブルは用意していた。

「さて、話の本題に移ろう。その生娘がワシに指導してもらいたいとか」

そう言うってアレクサンドはアストールを見つめる。その視線は厳しくも、どことなく温もりも感じられた。

「はい。ぜひご教授頂けたら、私としても幸いです」

アストールは普段の師匠の前では、絶対に出さない態度で願っていた。

「ふむ。まあ、それはいいとして、扱う武器はなんだ？」

「本人としては両手剣を望んでおりましたが、拙僧が細剣を使うように進めました」

そう言うってジュナルはアレクサンドに向き直る。

「ふむ。華奢な体では、精々片手剣を両手で振り回すのがやっとである」

納得したアレクサンドはアストールを見ると、微笑を浮かべる。

「そう気にする事はない。体に合った武器が、最もその人の強さを引き出すのだ。エステイナ殿はそれが細剣だったということだ」

アストールはそう言われて、今一つ納得できなかった。

今の今まで重い大剣を振り回してきた分、今更になって細剣を使いなおすことなど、アストールには屈辱以外のなにものでもない。もちろん、アレクサンドの言っている事は正しいことに変わりない。

「少し、お手合わせ願おう。稽古をつけるのはそのあとでいい」

アレクサンドは笑みを浮かべると、立ち上がって、玄関横の立てかけていた剣を持っていた。アストールもそれにならって、立ち上がっていた。

そうして、全員が外に出ると、二人は向かい合っていた。

「いつでも好きな時にくるがいい」

アレクサンドは剣を構えることなく、佇んでいる。いつもと変わらない師匠のやり口に苦笑しつつ、アストールは細剣を抜いていた。

「では行きますー！」

アストールはそう言つと真正面から、迷いなくアレクサンドに突っ込んでいく。

そして、彼の目の前まで来ると、上段から剣を振り下ろす。しかし、それをアレクサンドは、剣を鞘から抜いていとも簡単に打ち返

す。

「細剣は振り下ろして斬るものではない。突くものだ」

そう言っアアレクサンドは、アストールに迫りよっていた。

じりじりと距離を詰めるのではなく、ずかずかとその巨体をアストールに詰めていく。

そのあまりにも無防備な距離の詰め方に、アストールは流石に焦りを覚えた。

他人を試すための一手段であるが、持っている剣は刺されれば死ぬ。それを恐れない点は、流石は師匠といったところだろう。

アストールは改めて細剣を構えなおし、アレクサンドに向かって突きを放っていた。

アレクサンドは待つてましたとばかりに、その細剣を剣で大きくはじいていた。

宙を舞った細剣はアストールの手を離れ、地面に虚しく音を立てて落ちていた。

「正確ではあるが、単調な突き。弾かれればいとも簡単に剣が手を離れる。この程度では話にならん。途中構えを変えたようだが、全く持つて動きは素人に等しい」

アレクサンドはそう言っくと剣をしまっていた。

散々な言われように、アストールはすっかり気分を害していた。なれない体に加えて、細剣という今まで扱ったことのない武器、

そして、いつものような力が発揮できない苛立ち、全てが重なって、アストールを自棄にさせていた。

「まずは構えの練習からだな」

アレクサンドはそういうとアストールの前まで歩み寄っていた。

「明日からみっちりこの儂が稽古をつけてやる。覚悟をしておけ」

そうして、その日はアレクサンド卿の邸宅で、一晩を過ごすのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8573z/>

私の騎士（かれ）は女の子！？

2012年1月6日12時46分発行